
死に物狂い/いきものぐるい

きりく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死に物狂い／いきものぐるい

【Nコード】

N3990J

【作者名】

きりく

【あらすじ】

「お前はもう死んでいるんだ」

そんなことを齡17歳、高校二年、青春真っ盛りで言われるとは誰が想像するだろうか。

信じたくはないが俺は死んだ、そして俺を蘇らせた少女にそんなことを言われる。

蘇るんじゃない、戻^{よみがえ}りたいんだ

「生きものぐりで死に永らえてやるよ」

そう言った少年の目は確かに生きていた。

ブローグ／グッバイ俺

秋の晩期、冷たい風が吹き付ける曇天の下。

「のおお、やべえやべえ！遅刻する！」

なんて死語を叫んでる俺は傍から見たら曲がり角の王子様だろうか、否、変態だろう。

これでトーストまで加えていたら著作権保護法がなんとかで訴えられそう。

クシヤクシヤのYシャツが強風にあおられバタバタ音をたてている。紺色のズボンからはみ出た携帯のストラップが同じくあおられ今にも飛んでいきそうだった。

「ちくしょ、これだからYシャツは・・・着るのも洗濯すんのもめんどくせーんだよ」

汗で湿ったハンドルを握りなおしサドルから腰を浮かす。
本気モード突入、髪が乱れるのなど気にも留めない。

苦勞の甲斐あつてか、普段は15分弱かかる道も5分で通過出来た。だがそんなことに舞い上がっている場合じゃない、全長80mはあろうかという程の上り坂に差し掛かる。
いつもなら大きく迂回して平坦な道を往くが今はそうも言ってもらえない。俺に残された時間は残り10分。
そこを回っていてはいくら本気モードでも15分はかかる。

この坂を上りければあとは下るだけ、五分ともかからないだろう。

俺は覚悟を決め再びハンドルを握りなおす。

最早言葉を発する余裕すらない、一心不乱にペダルをこぎ続けた。坂上から吹き付ける風が急な斜面と相まってどんどんと体力を奪っていく。

坂を上りきった時には俺の身体は風呂上りとも言わんばかりに濡れていた。

秋も終わりと言つのにこの暑さはなんだろう、自らの体内から溢れる熱に苛立ちを感じる。

が、あとは下るだけ。

さっきの鬱陶しい風が今度はドライヤー替わりになってくれる。

地面を蹴ると自転車が軽快に坂を下り始めた。

漕がずとも勝手に加速してくれる。

「助かった、これでなんとか間に合うか…」

一瞬だけ、瞼を閉じる。

次に目を開けたときに飛び込んできたのは人影だった。

そう遠くない、寝起きの頭でも理解できるほどに近い。

体中から冷たい汗が噴出したのが分かった、幸いそれが俺の頭に冷静さを取り戻す。

だが遅かった、ブレーキだけでは間に合わない、止むを得ずハンドルを横にきった。

坂の上だ、当然自転車は横転し汗でぬれた手はハンドルを掴んでいられず身は投げ出された。

坂下に石垣に激突する。

後頭部から背中にかけて衝撃が走った。

目に映ったのは滑り降りてくる自転車と赤い曇天。
そしてさっきの人影であろう、一人の少女だった。よく確認出来ない、とにかく赤い。

あそこで瞼を閉じてしまったのが始まりだったのかもしれない。
たった、たった一瞬のつもりだった。

だが朝ということもあり馴れない運動をした俺の瞼はなかなか開いてくれなかったようだ。

俺の命は、ここで終わった。

ブローグ／グッバイ俺（後書き）

皆様はじめまして！この度から小説を書いていきたいと思っています。
稚拙な文章ではありますが興味が沸いた方はこのまま読んでいただ
けると幸いです><; それではお目汚し失礼しましたゝ

一カイク 第二話／最悪のオープニング

ふと意識が戻る。

目は開けた、視界に飛び込むのは先ほどとは打って変わった灰色の寒空。

痛みは感じない、此処は天国かとも思ったが地を掴む手の感覚はしつかりとあった。

ゆっくりと上体を起こし、自分の身体を見渡してみる。

驚きで俺は眉を潜めた。白い服を汚すのは土の茶色だけで、出血はおろかかすり傷一つ付いていない。

「あ、チャリ・・・」

顔だけ横に向けるとそこには今の自分とは正反対の、無残な自転車の死骸が横たわっていた。

アングリと口を空けて呆然としてしまっ、言葉にならないとはこの事だ。

深いため息を一つ吐いて今度は腰を上げる、どうやら本当に無傷らしい。

完全に車体が90度になっている相棒を引きずりながら再び学校へと足を向けた。

（これ完全に遅刻だよなあ・・・）

校門がうつすら見えてきた辺りで携帯の安否を思い出す。

慌ててポケットから取り出し無事を確認するが、そんな心配とは裏腹に相棒その2はしっかりと機能していた。

しかし、時計が示す時間は俺のテンションを無理やり下げてくれる代物で。

正門は無論閉ざされていたので、自転車を何処に置いておくか考えながら仕方なく裏口へと向かう。
ひとまず普段通りの駐輪場に置き、教室へと一心不乱にダッシュする。

「間に合えええええ！」

類稀なる努力が俺にもたらしたのは、教師の口うるさい小言だけだった。

「きりーっ、さようならー」

「はい、お疲れさん」

チャイムと共に教室内の生徒が次々と帰り支度や、部活の準備を進める。

俺はと言うと、何もしないまま机に突っ伏していた。

「よっしゃー、さあさあ和人君、今日も遊びに繰り出しましょうか」

聞きなれた耳に障る声が聞こえてくる。

重たい頭をあげると見慣れた顔が一つ、二つ、三つ、男が1人に女が2人。

彼らを見る俺の目はどれほど死んでいたろう、いつも死んでいるほうではあるけど。

首がガクンと勢いよく落ち、机との衝撃で頭が少しバウンドした。

「なんだよー、お前今日一日中そんな感じだったよな。とにかくいいーこーおーぜー」

「・・・いけない」

「なんか元気ないね、大丈夫？」

さつきとは違う、今度は自然と鼓膜に溶けて行くアルトボイスが聞こえた。

顔は突っ伏したままで右腕を上げ、力無く親指を立てる。

「自転車・・・」

再び頭をもたげて小さく口を開いた。

「朝自転車ぶっ壊れてさ、修理出しに行かんといかんから・・・シヤレ？」

最初に絡んできた男を軽く小突いてやる。

そのまま勢い無く立ち上がり、肩にずっしり来る鞆を担いで教室を出た。

アホが騒いでるのは気にも留めない。

玄関には橙色の斜陽が落ちていた。

この季節にもなると日が落ちるのもかなり早くなっているだろう。

自転車はと言うと相変わらず直角だった。

鞆が一層重くなったような気がして、自然と白いため息がこぼれる。

自転車を引きずりながら歩くうちに今朝の坂に差し掛かった。

ふと背筋に冷たい感覚が走る。

「よく生きてたよなあ俺」

ポツリまた白い息を漏らし、馴染みの自転車屋へと足を向けた。

無心に歩くうちに見慣れた看板が飛び込んできた。色あせた文字は辛うじて「自転車屋」というワードが確認できるだけで。

人がいないと思わせるほどに寂れたこの建造物は、俺が生まれる前からあつたらしい。

建てつけの悪いドアがうるさいくらいの音を立てて開く。その音で、店の奥からこれまた見慣れた顔が出てきた。

「ちす」

「お、和人が。いらっしやい」

平凡、という言葉が似合う人をこの人以外に知らないほどそいつはいつも通り平凡だった。

とりわけ特徴の無い平凡な短髪、軍手にエプロンとテンプレートな自転車屋の服装。

顔立ちが整っている分余計に平凡さが目立つ。

まだ若いんだからもっとお洒落とかすればいいのに、と会ったびに思ってしまう。

「で、今日はどうしたんだい」

「俺の横にある異物が見えないんすか」

「だっはは、また和人らしい壊し方だね」

ニヤニヤしながら皮肉全開の言葉を投げてきやがる。ちなみに自転車を壊したことは過去に一度しかない。

「つかこれ直りそう？」

「んゝ、車体があちこち曲がつてるねえ。とりあえず時間はかかるかもしれないけどやってみるさ」

その後、数十分程とりとめのない話をして店を出た。

辺りはすっかり闇に落ちていて、目に映るのは飛び飛びに並ぶ淡い蛍光灯の明かりだけだった。

道に行く人は居ないかと前後を確認し、柄にも無く鼻から歌声がこぼれる。

肩の重さも忘れ上機嫌になっていたのも束の間、視界に人影が飛び込んできた。

身体全体がギクリと跳ね上がる。

（なんだあれ・・・）

しかし、それは無粋な鼻歌を聞かれたからじゃない。

目に映った「それ」は何か・・・異常だった。

微かな明るみに映える身体は痩せこけており、身に纏う衣服は所々が破れている。

足取りは不確かで、のろのろと此方に近づいてきていた。

一言で言えば映画やゲームの中でしか見たことの無い、ゾンビの様な。

やばい、と本能が叫ぶ。

それとほぼ同時に、眼前の異形が穢れた雄叫びを上げた。

先の足取りとは打って変わったスピードで駆け寄ってくる。

振り上げられた手には恐らく俺の首を引き裂くであろう爪が鋭く照っていた。

迫る危険をよそに俺の脚はすくみ、一向に動こうとはしない。

（やばいって、逃げろ！逃げろ俺！動けっての！）

反射的に瞼が落ちる、視界が蛍光灯の明かりさえ見えない黒の世界に変わった。

（あれ・・・そっぴや今朝もこんなことあったような・・・）

わずかに残る冷静な思考でそんなことを考えていた。

どれくらい目を瞑っていただろう、一瞬にも永遠の様に感じられた。そう感じさせるのはいつまでも身体に痛みが走ることが無かったからで。

痛みを感じる間もなく殺されたのだろうかとも思ったが、その予想

とは裏腹に瞼は軽く開く。

目に映るは今朝と同じ、だが赤くは無い、一人の少女であった。

一カイキ 第一話／最悪のオープニング（後書き）

しばらくは書き溜めておいたものを投稿していきます。
次回バトルシーン、相当上手く書けてません

1カイキは第1節とか捉えてください、分かりにくくてすみません
><;

第二話／傘でのゴルフスイングは危ない

「お前・・・今朝の、グエッ」

俺が喋り終わるのも待たず、少女はYシャツの首根っこを掴み化け物と反対の方向へ走り出した。

一瞬蛍光灯に照らされ、少女の容姿が確認出来る。

パツと見小学校高学年から中学1年といった印象を受けた。

雨も降っていないのに膝まで隠れる合羽を着こんでいて、顔は確認できない。

防寒の為かと思ったがそのくせ膝から下は生足だった、そそる。

ちなみにロリコンじゃない。

そんな特異な格好もさることながら、俺の理解の範疇を超えていったのは今のこの現状なわけで。

化け物に追われていることじゃない、俺より遥か年下の少女が俺を軽々と引つ張って走っている状況のことだ。

だがこの状態に身を委ねることが一番安全だと理解はしていた、そう遠くない後方から化け物が少女に勝るとも劣らないスピードで駆け寄ってきている。

少しずつ距離を詰められているのが暗い中でもよく分かった。

「おいおい、やばいつて追いつかれるぞ！」

「ち・・・」

軽い舌打ちと共に少女が俺を掴んでいた手を振りかぶる。

俺はというと何が起きたか理解する間もなく、少し前方の地面に投

げ出された。

もう自分より数倍の重さのあるお兄さん引きずりながら走ったり投げたりと訳が分からない。

SASUKEにでも出るつもりかこいつ。

一方少女は迫り来る化け物と対峙している。

腕力がすごいのは分かった、だがいくらなんでもあんな小さな女の子がどうか出来る相手ではない。

「おい、何やってんだ！早く逃げるぞ！」

「もう走れるな？なら離れている、離れすぎるなよ」

此方は向かず、背中を向けたままで語りかけてくる。

少女の口調はその外見とは裏腹にとても大人びていた。

「なにいつてんだ、あんな化け物がいるのに置いていくわけには・・・」

化け物が少女の眼前まで迫り、鋭い爪を携えた腕を振り上げる。

「心配ない」

刹那、化け物の身体が霞む。

あれが水飛沫によるものだと理解するのには時間を要した。

化け物が遙か遠方へと吹き飛ばされる。

少女が立っている辺りの地には水溜りが発生していた。

「私も化け物だ」

そう言った少女の手には紺色の傘が握られている。
何時の間に取り出したのだろうそれは、小さな水滴を纏い蛍光灯の
光を反射していた。

ずぶ濡れの怪物がよろめきながら立ち上がり、再び襲い来る。
呆れるまでの単調な突進攻撃を、少女は傘を剣のように扱いいなす。
剣と爪による小競り合いがしばらく続いた。
後、化け物が体格の違いを活かし、少女に覆い被さろうとする。

少女は咄嗟に屈み、化け物の細い足をはらった。

「はぁっ！」

そのままバランスの崩れた体の胸部に鋭い一撃を突き放つ。

その衝撃に耐え難い体はそのまま後方に倒れた。
化け物が起き上がろうとするが、少女が仰向けのそれに飛び乗り、
間も無く傘の先端が今度は喉に刺さる。
潰されかけた喉から悲痛なうめき声が発せられた。

「待てつて、流石に死んじまうぞ！」

ちやっかり離れた俺の忠告も空しく、少女は絶えず化け物への猛攻
を止めない。

跨ったままの状態で傘を扱い、殴りつけ、反撃の隙さえ与えない。
しかしその一瞬の隙を付いた化け物の一撃が少女の肩を捉えた。

間一髪で避けようとしたものの、化物の鋭い爪は確かに少女の小さな
肩を抉り裂いていた。

赤い液体があたりに飛散した。

それに僅か怯んだ少女が、化け物に蹴り飛ばされる。小さな身体が俺の近くまで。

「お、おい大丈夫か？」

「ここでは分が悪いか・・・走るぞ」

痛みで顔を歪めながらも咄嗟に立ち上がり走り出す。
迫る化け物を一瞥し、俺も慌てて彼女の後を追いかけた。

しばらく走る内に大きな河川敷にたどり着く。恐怖のせいか疲労感
は全く無い。

住宅街から遠く離れたここは蛍光灯の設置も少なく、化物の姿は辛
うじて遠方に確認出来る程度だった。

「くっそ、しつけない・・・！」

少女が居た方を見ると、そこに彼女の姿は無い。
慌てて辺りを見回すと川の中にその姿はあった。勝手が分からない
まま俺も川へ足を踏み込む。

川の水は冷たいがそう深くは無かった、せいぜい膝までつかる程度
で。

見ると、傘が水の奥底に突き刺さっている。
柄の部分だけが水面からのぞき、その柄を中心に静かに波紋が広が
っていた。

少し遅れてやって来た化け物もこちらに下ってきた。
先の猛攻も介さないのか、動きは全く衰えていなかった。

気圧され思わず後ずさるが、ここで水面にある変化がおきていることに気づく。

先程の波紋が治まる所か、徐々に規模を強めていき、大きな波となっていた。

やがては川全体がまるで一つの生物かの様に荒れ狂う。

ある一部は突起し、ある一部は大きく陥没していて、もはやさっきまでの平面な水面の面影はどこにもなかった。

自分の縄張に踏み込もうとする外敵を拒むように、意を持った水が太い鞭のようにしなり化物に襲い掛かっていった。

大量の水に打撃され、化物が防波堤に叩きつけられる。

それが合図となった。

「ふんっ・・・！」

少女が深く潜り込んでいた傘の柄を掴み、引き抜く。その勢いで大きな弧が傘の先端で描かれた。

すると水で形成された巨大な三日月形の刃が、一直線に化物へと向かっていく。

川の上を走る刃が水を巻き込みどんどん肥大化していき、化物の眼前に迫るときには身の丈5倍もの高さになっていた。

収束された高密度の水刃は、容赦なく化物の身体を二つに切り裂いた。ウォーターカッターという物があるが、端的に言えばあれに似たようなものだろうか。

多量の水の向こうから穢れた断末魔が轟く。

勢い余った刃は防波堤にぶつかり八方に飛散していった。

刹那の後、荒れ狂っていた水が思い出したように動きを止め、形を失う。

俺達に大粒の雨が降り注いだ。

化物がその雨に融け、水と同化していく。

少しもしない間に、無残に切り裂かれたその身体は見えなくなってしまった。

さっきまでの喧騒がまるで嘘のような静けさが河川敷に届き渡る。

「・・・やったのか？」

「ああ」

大きな安堵の息が漏れた。

緊張していた背中から力が抜け、その場にへたり込んでしまう。

「あー、助かった。お前スゲーな」

「これが仕事だからな」

こちらを見ないままに少女は答える。

「仕事？」

「そう、そしてこれからのお前の仕事でもある」

思わず眉をひそめてしまう。

彼女が何を言っているのか理解できなかったから。その言葉を皮切りに少女の顔がこちらを向いた。

「お前はもう死んでいるんだ」

第二話／傘でのゴルフスイングは危ない（後書き）

臨場感なさすぎゴメンナサイ

死んでいく決意

「お前はもう死んでいるんだ」

初めて顔が露になった。しかし前につばが出ているサンバイザーの様な被っていてよく分からない。せいぜい表情が確認できるくらい。

彼女の瞳は一点、俺の眼をジーツと見続けていた。

深く吸い込まれそうな青みがかった可愛い瞳、日本人だろうが目の色はそれには見られないもので。

一瞬か、はたまた暫くの間その瞳にとらわれてしまい、惚けてしまう。

その瞳に映る自分の姿を見て、我を取り戻す。と同時にまたパニックになった。

思考がハイスピードで駆け巡る。

え？俺死んでるの？いやいや、だって現に会話してるじゃん。少し毒の効いたジョークとしか思えない。

そうじゃないなら某世紀末物語の見すぎな電波さんだろう。

少なくともストレートな意味としては受け取れなかった。

「えーと、ん？」

さっきの出来事すら纏まり切っていないのにこんな追い討ちをされてはパニックにもなる。

口から出るのは言葉にならない声ばかりだった。

そんな俺を見てか、複雑な表情と共に少女が口を開いた。

「今朝、自転車から投げ出されたのは覚えているか」
「・・・」

また背筋に冷たいものが走った、水の冷たさではない、鋭い刃物の様な冷たさ。

「あの時お前は死んだんだ」
「は・・・はは」

細くなった喉の奥から小さな笑いが搾り出された。

「何言ってるんだ。現に俺は今生きている、それとも何か？俺がゾンビだって？」

「ゾンビか・・・それを言うならさっきの奴のことだろうな」

なんてこった。

さっきのは本当にゾンビだったらいい、この目で本物を拝めるとは夢にも思わなかった。

「だがお前は違う、お前が死んだ時私が蘇らせたからな」

電波さん決定。どうやら俺をオカルトの世界にでも引き込みたいらしい。

呆れながら、ゆっくりと腰を上げ岸へと向かう。水を吸い込んだ服がとても重い。

「それでお前にはこれから・・・お、おいちょっと待て」

慌ててトコトコとこちらについて来る。こうゆう仕草に関しては本

当に子供らしい。

「助けてもらったことは感謝してるぜ、けどな、俺オカルトには興味ないんだ。わりーね」

「オカルト・・・？何を言っている、お前はこれから私の・・・お、おいだから待てといっている」

構わず歩み続ける俺の袖を引っ張ってきた。

不本意にも歩みが止まる、相変わらず本当に子供なのか疑う腕力だった。

このままでは肩ごと持っていかれそうだが、岸に着いたところで腰を落ち着ける。

「やっと待ったか。いいかこれからお前は私の・・・」

こいつが言うところによると。

俺は今朝死んで、こいつに蘇生された。

その時にどうやら何らかの契約を結んだらしい、これからはこいつの仕事のパートナーになるそうだ。

こいつの言ってた仕事というのはさっきみたいなゾンビ、こいつはグールと呼称していたが。

そのグールを討伐していくこと。

更にはそのグールを討伐するための政府直属の秘密機関があるらしい。

これから俺は今現在の生活を全て捨てて、そこに服属することになるらしい。

「勘弁してくれ・・・信じられるわけが無い」

「奴らは死にながら生きるお前達に惹かれるんだ、これからも狙われ続けるぞ」

その言葉を聞いて愕然とする。他人に恨まれる理由はあるとしても命まで狙われる理由はことさらあるわけが無い。

「あんなが他にもまだいんのかよ・・・」

手を顔にあて大きなため息を付く。

「第一、そんな化物がのさばっていて世間で噂にならないわけが・・・」

「グールは一般人に視覚出来ない。だが人間に様々な危害を加える、普段は緘口令が布かれるがマスコミが先走り報道してしまった原因不明とされる事故事件は大方グールによるものだ」

「国全体で隠蔽工作ってわけかい・・・こんなご時勢、余計に信憑性に欠けるぜ」

「まだ信じる気はないか？」

膝に手を当て、屈伸の力で勢いよく立ち上がる。

「たりめーだ、わりいが俺が死んだことすら信じてないんでね。じゃあな」

服が吸った水を搾り出し、自宅へと足を向ける。

それきり少女が何かを問いかけてくることも追いかけてくることも無かった。

「ただいま、って誰もいないけどな」

自分で自分に突っ込む。高校生の身で一人暮らしというのは今時珍しいものだろうか。

部屋の電気を付け、まだ乾かないYシャツとズボンを脱ぐ。

散々水に浸かり、もう風呂に入る気すら起きない。

シャツとパンツ一枚のラフな格好でベットへと身を投げた。

「くそ・・・」

小さく悪態をついたのは、一人の少女の言葉が離れなかったからで。

カーテンからのわずかな射光で目が覚める。

辺りを見渡すと脱ぎっぱなしのYシャツとズボンが無造作に置かれていた。昨日、あのまま寝てしまったらしい。

半分しか開いていない目で時計を確認する、針はちょうど北と南を指していた。

「6時か・・・早いけどチャリもないし起きよう」

いつも通りの身支度を終え、いつもより早い時間に家を出た。

外は相変わらず冷え切っていて、早朝ということもありなお更だった。吐く息は白い。

徒歩とはいえまだ早い時間だったので坂を避けるルートに行くことにする。

寝て覚めても頭の中をよぎるのは少女の言葉。

「意外とセンチメンタルだな俺・・・」

寒さで身震いしながら歩くうちに見慣れた大通りにでる。時間も丁度良いものになり、生徒達の談笑が辺りから聞こえてくる。

通りを進み校門が見えてきた辺りで後方から金属的な音が聞こえてきた。

振り向くと数台の自転車がこちらに迫ってきている、どうやら俺に気づいていないらしく、構わず進行を進めてきた。

慌てて右へと飛びのける、もう少し気づくのが遅かったら衝突されていたかもしれない。

「まったく、あぶねーな！」

猛スピードで駆け抜けていった自転車にその怒号は届かなかった。

すぐさまその姿が遠のいていく。

心中で軽く悪態をつき、再び校門へと歩みを向けた。

HR前の廊下は賑やかだった。

所々に談笑する生徒の集団が散らばっていて、中には見慣れた顔もいくつかある。

だが昨日の疲労もあってかそれらに交じろうとはせず、一直線に教室の自分の机に向かい席に着くなりすぐさま突っ伏した。

木質の冷たさが額に広がった。

暖房の暖かさが心地よい陶酔感を誘ってくる、思わず瞼を閉じそうになるがやかましかった教室が静かになることを受けて教師が来たことに気づく。

号令の指示でだらしない起立礼を行い、崩れるように椅子に座った。教師が座席表を見ながら出席を確認していく、やがては俺の席の近くに視線がよった。

そして丁度、俺のところで視線が止まる。

「なんだあ？和人は今日も遅刻か」

やや悪戯な風で言った。

生徒をいじるのが好きな教師で、昨日のことだからかっているのだろーと思いき笑い受け流そうとした。

「先生がグチグチ言うから来たくなっちゃったんすよ！」

今度は前方の男子生徒が大声で叫ぶ。

それに呼応して室内に笑いの渦が起きた。

流石にここまでいじられて無視は相手に失礼だ、レスポンスをいれてやることにする。

「はい、俺こー」

手をヒラヒラと上げちゃらけた様に言う。しかしそのことで笑いが強まることも弱まることもなかった。

「たく、来たら相談室にひっぱりこんでやるか」

その言葉で、自らのうちに少量の違和感が生まれた。

そう言ったのを皮切りに再び出席を取り始めた。流石にしつこいのではないかと思ひ顔を訝しめる。

だがそれきりその話が持ち上がることも無く、違和感も気にならなくなった。再び暖かみに身を委ねる。

睡眠と覚醒の間をつつらうつらと彷徨う内に1時限目の担当教師が

教室の扉をあけた。

教卓に付くなり座席表を抱え、指差しながら先程の担任教師と同じように生徒の姿を確認していく。

「はい、大崎和人君以外全員出席ですね」

眠っていた違和感が再び膨れ上がる。

普段そんな冗談を言うような教師ではないことは知っていた。その事実が俺の中の違和感を更に増幅させていく。

性質の悪い悪戯に引つかかっているような気分が俺を包み込んでいった。

居てもいられず一つ前の席の生徒に話しかけるため、手を伸ばし肩を叩こうとした。

だが俺の手は彼の肩に触れることなく空を切った。

いや、この表現は少し語弊があるか、確かに俺の手は肩を捉えたが触ることが出来ない。

何度も試してみるが、全てすり抜けていくだけだった。

「な・・・どうなってんだ？」

大声をあげても誰も此方を振り向こうとはしない。誰に何を呼びかけても誰からも応えは返ってこない。

ふと、少女が言っていたことを思い出す。

―グールは一般人に視覚出来ない。

その言葉を振り切るように勢いよく立ち上がる。
机と椅子が大きな音をたてるが、それでも誰も、何も応えてはくれなかった。

「冗談きついつてーの・・・」

窓に映る顔は悲しみに酷く歪んでいた。

鞆を取ることも忘れ、おぼつかない足取りのまま校門へと向かう。
そのまま校門を出ると、俺に視線を向けている、合羽姿の少女がいた。

その顔に表情はなく、蔑みにも同情にも見えた。

「グールとは違えどお前も既に死者なんだ。現世に干渉することは出来ない。昨日を境にお前と現世の繋がりはほぼ完全に閉ざされたんだ。」

声も無く、その場でくずおれる。

泣きたいのに泣けなかった。目頭が苦しくなっても一向に涙は零れてはこない。

地面に向かって精一杯の咆哮を叩き付けた。

「・・・戻りたいか？」
よみがえ

「あたりっ・・・まえた・・・！」

零れるのは涙ではなく嗚咽ばかりで。

「なら私と共にこい。グールを討伐するだけじゃない、お前のような奴を救うのも私達の仕事だ」

ゆつくりと、小さな手が差し伸べられた。

この手がくもの糸か、地獄への片道切符かは分からない、だが必死に手繰り寄せる。

そのどちらでもない、天国へも地獄へも繋がっていないものであると信じて。

「・・・生きものぐるいで死に永らえてやるよ」

そう言い放った少年の目は確かに生きていた。

死んでいく決意（後書き）

大分長くなっちゃいました（、旦、）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3990j/>

死に物狂い/いきものぐるい

2010年10月28日06時52分発行